

触覚での読みとりに適したフォント ForeFinger M(2)

- 濁点・半濁点・促音・拗音

○小田浩一・原田尚子（東京女子大学・現代文化学部・コミュニケーション学科）
・山本明彦（フォントデザイナー）

立体にしたカタカナ文字として、どのような書体をつくれば触覚での読み取りに適しているのかを検討する研究（小田ら，2001）の続報である。既存の細ゴシック体と新たにデザインした ForeFinger M の濁音・半濁音（図 1）・促音・拗音（図 2）を表す文字について、高さ 1.58 cm の字形を立体コピーによって触って知覚できるようにし、20 歳代の晴眼の女子大学生 6 名に目隠しをして左手人さし指で観察させ、文字認識の正答率を比較した。ForeFinger M では、濁点・半濁点の大きさが細ゴシックよりも 50% 程度大きくデザインされている。その結果、濁音・半濁音については、統計的に 1% 水準で有意な、平均して 5% 以上の正答率の違いが得られた。促音・拗音については、どちらの書体においてもほとんど誤答がなく有意差が見られなかった。一連の研究の結果、全体として ForeFinger M が触覚での読み取りに適したフォントであることが立証された。

謝辞

厚生労働省からの感覚器障害等に関する科学研究補助金を受けた。本研究の一部は、第二著者の卒業研究として行われた。

プ ゾ プ ゾ

図 1. 濁音・半濁音の刺激例：左 2 つが ForeFinger M で右 2 つが細ゴシック。実際の実験では、文字間隔・行間隔ともに 1 文字であった。

ギョ タッ ギョ タッ

図 2. 促音・拗音の刺激例：それ一文字では小さい清音文字と変わらないので、前に清音・濁音・半濁音をつけた 2 文字の組み合わせ 127 種類が用いられた。一組の組み合わせの内部の文字間隔はなし、組み合わせの間と行間隔は 1 文字であった。

文献

小田浩一・原田尚子・山本明彦 (2001)：触覚での読みとりに適したフォント．第 10 回視覚障害リハビリテーション研究発表会論文集，28-31